

# シブヤ西武 美術画廊/工芸画廊 展・覧・会



加藤朝美「コンティの塔」 ブロンズ 46×47×47



久世建二「87-01 87-02 87-03」 陶 各77×46

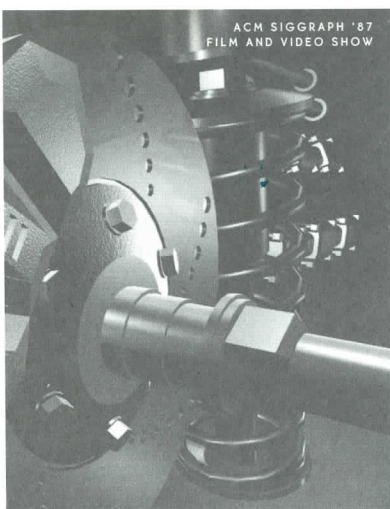
■10月22日～'88年1月26日の開催予定■シブヤ西武B館7階＝美術画廊<sup>462-3476</sup>（ダイヤル・イン）・工芸画廊<sup>462-3475</sup>（ダイヤル・イン）

|      | 10/22木～10/27火    | 10/29木～11/3火    | 11/5木～11/10火         | 11/12木～11/17火  | 11/19木～11/24火              | 11/26木～12/1火           | 12/3木～12/8火 |
|------|------------------|-----------------|----------------------|----------------|----------------------------|------------------------|-------------|
| 美術画廊 | 舟山一男<br>個展       | ヴィクトル・<br>スパン個展 | 版画による女たちの<br>ナイフな試み展 | 一水会陶芸部<br>公募展  | アメリカン・コンテンポラリー<br>フォトグラフィ展 | 山川茂<br>個展              |             |
| 工芸画廊 | 彦坂昌宏<br>メタルワークス展 | 森岡成好<br>陶展      | ワジマウルシ展              | 久世建二陶展         |                            | 鯉江良二<br>陶展             |             |
|      | 12/9水～12/15火     | 12/16水～12/22火   | 12/23水～12/29火        | 12/30水～88/1/5火 | 1/7木～1/12火                 | 1/14木～1/19火            | 1/21木～1/26火 |
| 美術画廊 | 野又稔展             |                 | コンテンポラリー<br>版画展      | 澁澤卿展           |                            | 岸田淳平展                  |             |
| 工芸画廊 | 鯉江良二<br>陶展       | ユールの夜に灯展        |                      | 宮永理吉陶展         |                            | 加藤朝美彫刻展<br>——ローマからの風—— |             |

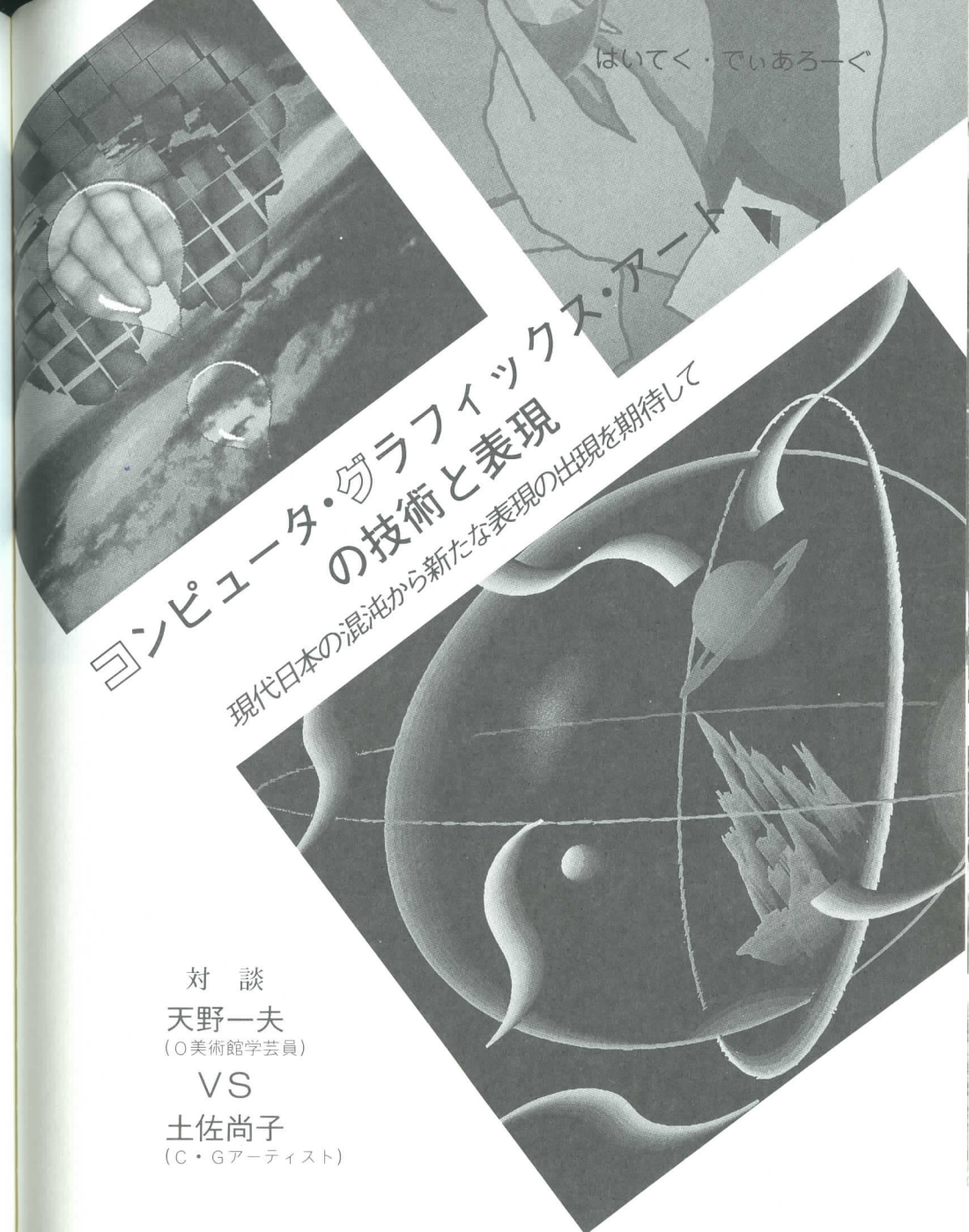
SEIBU  
西武  
シブヤ

定価 800円





SIGGRAPH 87 のパンフレット表紙



# コンピュータ・グラフィックスの技術と表現

現代日本の混沌から新たな表現の出現を期待して

対 談  
天野一夫  
(O美術館学芸員)  
VS  
土佐尚子  
(C・Gアーティスト)

土佐尚子 Visual Budda Vol.2より コンピュータ・グラフィックス

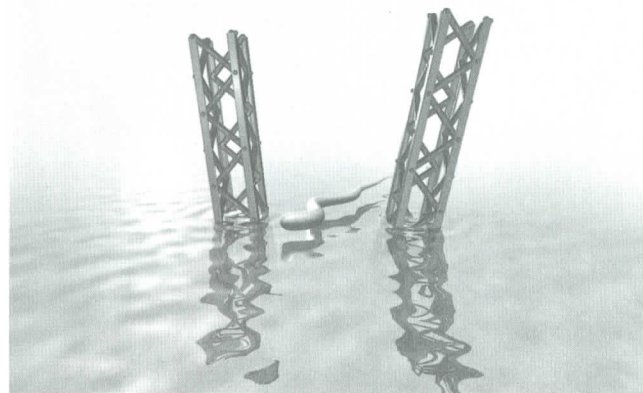
## 今年の『SIGGRAPH』に観る 世界のC・Gアートの傾向

天野 今年のSIGGRAPH(シググラフ)※に行かれたそうですが、いかがでしたか？

土佐 今年、米国アナハイムのコンベンションセンターで開催されました。ご存知の様に、SIGGRAPHは世界で最高水準のC・Gの学術会議と最大規模の展示会、最もエキサイティングなフィルム アンド ビデオショー、そして、インスタレーションを含めたアートショーなどから構成されています。今年発表された論文で、目立っていたものは、二つのアニメーションにおけるアプローチです。

一つは、ディズニースタイルの手描きアニメーションの延長である三次元アニメーションを作成する流れと、もう一つは、プログラムの作成によって可能となるC・Gの特徴を生かした物理的シミュレーション(具体的には風になびく旗や、波、及び波紋など)を積極的に導入しようとする流れです。それは、同様にフィルム アンド ビデオショーで流された作品にも影響が及んでいます。というのはディズニースタイルが、近年C・Gのリサーチをしており、

※SIGGRAPHは、日本の情報処理学会に相当するACM(Association for Computing Machinery)の分科会として一九六九年アメリカに設立。七四年に第一回年次会議を開き、以後毎夏アメリカ各地を巡回し、現在は世界最大のC・G会議に発展。今年はアナハイムで第十四回会議を開催。



木村 卓 H 一九八六年

今年のシーグラフで初めて発表したC・G作品『Oil Spot & Lipstick』を始めとし、キャラクターアニメーションが多かったのですが、そのほとんどが、ディズニーアニメの動きを手本として創られており、作品が全体的にアメリカナイズされていたね。

天野 作品が各国から集まっているにもかかわらず、開催国であるアメリカの影響が強いのですか？

土佐 そうですね、割合としては、米国五十%、ヨーロッパ二十%、日本三十%です。

天野 しかし、どうしてその本来アメリカの極めて地域的な文化歴史に基づく精神が歴史も文化も異なる他の国の作品にもみられるのでしょうか？

土佐 そうですね、日本の作品は、非常にアメリカの作品の影響を受けていますが、フランスの作品とは違った、もっとセンシティブな絵作りと優雅なアニメーションを行っていますね。

## ニューメディアの芸術は新しい技術であるほど表現内容との関係が自覚的でない

天野 僕は、ローテックでも、自分の地に着いた形で表現する部分というものはあるはずだと思います。

土佐 私も、いわゆる日本の伝統美とは違った現代日本の混沌とした社会の持つオリジナリティな文化というものが存在しているはずだと思います。そもそ

も日本の若いC・G制作者たちは、米国のC・Gを見て育ちましたから。しかし、その影響が作品にでしてしまうというのは、まだ米国を超えられない一線を持つている様な感じにもとれてしまいます。

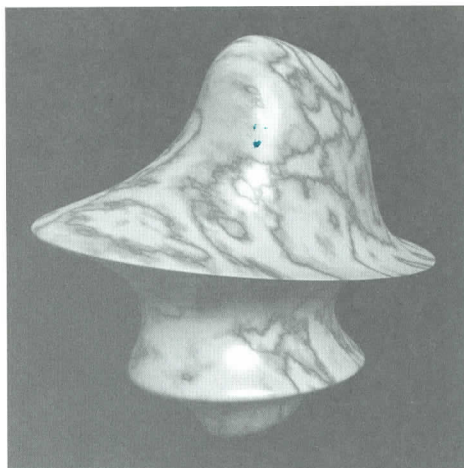
天野 確かに、表現技術は表現内容と無縁に生じているのではない。油絵の場合、西洋の近世に、地域的にも時代的にも限定された中から生れてきたもので、これは合理的な考えが絵画表現に際して、それにあった技術を欲していたわけですね。

そこで、日本の洋画の江戸後期からの移入過程においては、ただ単に技術を摂取するだけでなく、その裏にある合理的精神自体をも学ぶことになります。その中から日本の作家は、自分の美意識及び手法と洋画のそれとの折り合いをつけていくわけです。ところが、現代における科学技術の場合は、油彩の場合とは逆に、技術が先にあり、その後それを使得どの様な表現が可能なのかとまざる技術主導の形です。

現代のいわゆるニューメディアの芸術の場合、むしろ新しい技術であればあるほど、その自らの表現内容との関係がより強く自覚的であるべきなのですが、とかく安直に制作されており、意識的ではないです。

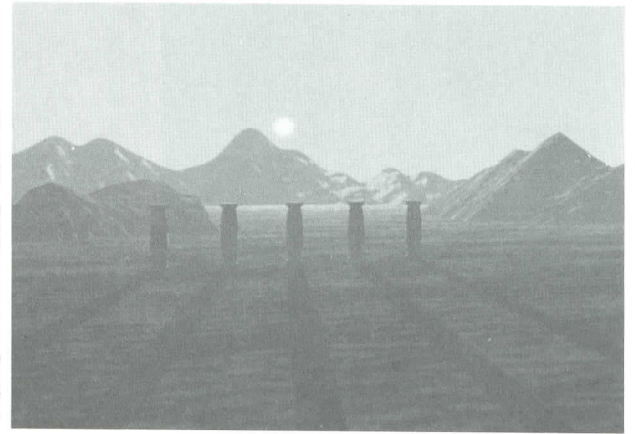
また、C・Gの様な技術の場合、たとえそれがアメリカで開発されたソフトであろうとハードであろうと、日本に移入した場合、その科学技術自体が基づく文化が単に一国のそれではなく、ユニバーサルなものである以上、表現自体がアメリカという一文化に規定される理由はあまりないでしょう。

それでも現在、日本のC・Gにおいてアメリカナイズされた表現が多く見られるのは、おそらくいまだアメリカへの皮相な精神的志向性が強いためでしょう。



藤嶋正樹 THE ADAMS APPLE OF GIRAFFE 一九八六年





福本隆司「廃墟にて」より「夕暮れ」  
一九八六年

土佐 まず言えることは、日本のC・Gアートの作品のレベル差が激しいということです。それに対応して、それらの作品群を見る人たちのC・Gアートに対する意識が低いと思います。

だから、強烈なインパクトとC・Gに対する考え方がはっきりしているアメリカのC・Gに影響されてしまうのではないのでしょうか？

## C・G固有の表現特性を生かした意識的作家がそろそろ出てきてもいい

天野 今の科学技術を支えるものも、油彩と同じ様に西洋の合理精神の裏付けがあると思います。

土佐 そうですね。私がC・Gアートに期待しているのは、従来の固定概念を超えるものの出現ですね。

天野 今のC・G状況は、「現代美術」と言うにはおこがましく、イメージが固定されているという点で、今の公募団体の絵と同じですね。

彼らは完璧にセザンヌとかフォービズムで表現が終わっているけれども、C・Gアーティストもそれよりは少し後の幾何学的抽象やシュルレアリスムまがいのもので、同様に現代の表現としては未成熟かつ無自覚的であると思います。

土佐 それは、まだC・Gというメディアが育っていないからではないですか？

天野 まさにそうです。写真などの初期発展過程のように、絵画などの既存の表現を模倣している段階で、C・Gの固有の表現特性を生かした意識的な作家

が、もうそろそろでてきてよいと思うのですが。

ところで、土佐さんの場合、その表現と技術の点で、ビデオの特殊効果とC・Gを合成して作ったイメージ作品「TRIP」(1985)から現在の創作活動まで、どう変化なさっているとお思いですか。

土佐 私は……数年ビデオアートの作品及びインスタレーション・ビデオパフォーマンスを創ってきましたが、「TRIP」の後、翌年「ECSTASY」という内省的な作品を創りました。そこで今まで同じ手法と方法論でアプローチしてきたものが、自己完結したような感じがします。

今後は、また違う形で、新しい方法論を見つけて作品を提出して行きたいと思っています。今考えていることは、もっと自分の作品の中に数学的な偶然性及び美術以外の要素も加えていきたいということです。

例えば、私はメディアとして最近C・Gを用いています。脳波の測定値をインターフェースを用いて、パソコンにデータ変換し、そのデータを脳波とシンクロナイズしたアートの映像に、数学的なアルゴリズムを用いて、さらに変換するということを現在行っています。その表現は、もちろん技術的なレベルを超えたものでありたいですね。

その結果は、「彩色音楽展87」<sup>\*</sup>で観ていただけたと思います。

<sup>\*</sup>「彩色音楽展87」―マルチメディア・プロダクションの新たな胎動―は、十月三十日(金)慧可断臂、十月三十一日(土)IKI―息―と題して西武池袋店8F Studio 200で開催予定。